

## 伝統文化と接合する映像メディアの人類学的研究 —中国雲南省タイ族の掛け合い歌の事例—

伊 藤 悟

国立民族学博物館 外来研究員

（現 日本学術振興会特別研究員／京都文教大学）

### 緒 言

映像メディアは世界規模で急速に普及と発展を遂げており、文化の画一化を展開するとともに、ローカル社会の創造性を触発し、独特な映像文化をも生み出している。近年、中国西南の少数民族地域では、暮らしのなかで実践される宗教儀礼や伝統芸能が映像メディアに記録されるようになり、複製された様々な自主制作の映像作品はローカル市場で流行している。こうしたローカル社会における自己表象の映像作品の流通は、欧米や日本で制度化された文化産業システムとは異なる原理によって起きており、様々な日常実践と相互作用しながら文化の流動を促している。

本研究では、中国雲南省徳宏州のタイ族社会の映像文化を事例として、伝統芸能を収録した自主制作映像メディアの制作や視聴、ローカル社会にとどまらないトランスナショナルな流通について参与観察調査を行ない、人々がどのように映像メディアを伝統文化の文脈に接合して実践しているのか、現代化におけるイーミックな感性的世界を民族誌的記述から明らかにすることを目指した。

### 研究の事例：可視化する文化、不可視のままの感性

中国では、90年代中頃より都市部を中心に安価なVCDメディアが一般家庭のあいだで急速に普及した。映画やミュージックビデオなど様々なコンテンツが販売され、娯楽や教養のため消費されるようになったが、実際には不正にコピーされた海賊版の爆発的な流行を引き起こし、深刻な国際問題となった。他方、中国雲南省の少数民族社会では、近年、安価なビデオカメラや録音機器の普及により、業者に依頼するなどして自分たちの冠婚葬祭や伝統芸能を記録するようになり、さらに一部の映像作品は無断複製され、海賊版がローカル市場で売買されるようになった<sup>1)</sup>。

たとえば、徳宏タイ族社会のローカル市場でも、私的に制作された記念作品がいつのまにか複製され流通している。それらの作品では決まって即興の掛け合い歌が収録されており、村ののど自慢や行事の主催者、そして近年台頭してきた半専門の民間歌手たちの歌を聴くことができる。かつて暮らしの様々な場面で歌われていたという掛け合いの即興歌は、近年では若者に継承されなくなった。しかし、複製された記念映像を鑑賞し、実際の行事に参加してみると、即興歌を楽しむため、そして記録するために、従来の冠婚葬祭や宗教儀礼の形式を柔軟に変化させる人々の実践が見えてくる<sup>2)</sup>。こうした、複製の容易なVCDやDVDメディアは、ローカルコミュニティ内での流通にとどまらず、ミャンマーやタイ王国など隣国タイ系民族地域のあいだでもトランスナショナルな還流をきたしている。

このように、ローカル文化の実践や継承は、グローバル化の影響を除外しては考えられなくなってきている。その独特な映像作品のジャンルも、グローバルなテクノロジーが伝統芸能と接合したからこそ生まれ、日々の暮らしのなかでは知りえなかった地域間の多様性や様々な変化、そして即興歌の現場を我々にも認識できるかたちで可視化させた。しかし他方で、その映像を享受するには、あらかじめ「即興歌の詩的技法」を身体化し、伝統文化や生活に関する知識をもっていなければならず<sup>3)</sup>、こうした映像作品は身体知や実践知を共有する限られたコミュニティにおいてのみ消費される、文脈に依存した「越境しない大衆文化」に属するのである。

このような複製メディアの作品は、拡散も容易で、文化的背景を共有しない人々の目につくこともあり、反復して視聴することで、音響と映像の側面から様々な情報を教養知として共有する可能性を有している。ただし、その内容を生活のために真に血肉や心の糧として吸収する、文化的に醸成された感覚や感性は、人々のあい

だで強固な構造が保たれていることがわかるものの、映像作品のフレームに収められた部分的な現実からだけでは把握しきれない。映像文化の隆盛を支える人々の生の感覚や感性は、実際に出来事が起きている現場への参与観察と調査者自身の模倣や学習なしには理解が難しいだろう。

## 研究の方法

本研究は、前もって胚胎させられた合目的な分析概念からローカル社会の文化実践の現代化やメディアの関係を記述するのではなく、モダニティの産物であるメディアを、現地の言説や身体的感覚から再構築することを目指し、タイ族の感性的世界から現代社会を相対化することを試みたものである。そのため、参与観察を主とする調査方法によって研究資料の蓄積に取り組み、筆者自らが対象社会に身を置き、日常の実践に関わることで覚える違和感や身体化などの「気づき」を考察の手掛かりとして重視した。こうした考えを受けて、学術雑誌『文化人類学』に投稿した論文では、筆者の映像実践の感覚が現地の映像の文法や語り方に「矯正」される調査経験に関して詳細に論じた<sup>4)</sup>。

本報告では、調査中に収集した掛け合い歌が収録された作品を手掛かりとして、徳宏タイ社会の映像実践の文脈を踏まえた考察結果の一部を述べることにする。ここではローカルの映像音響メディアの作品を、作品に関わる人々によって賭けられた様々な情報や思想、行為や言葉、そして「思い」の輻輳状態が音や映像に具象化しているものと考え、現実の日常の実践やその文脈に照らしながら種々の要素を解きほぐして考察するという方法をとった。以下では、作品がどのような自己表象を実現しているのか、そして作品のなかに社会的に構造化されたメディア実践の特徴を指摘する。

## 考 察

### 1. シャンヤー芸術団と私的な記念映像作品

地元の定期市の露店や店舗では、国内外の劇映画やテレビドラマの海賊版のみならず、様々な種類の海賊版映像メディアが販売されている。タイ族に限れば、若者はミャンマー側で制作されたシャン（タイ族）ポップスのミュージックビデオを好み、中年以上の世代は掛け合い歌や上座仏教の儀礼実践に関連した映像作品を好む。ミャンマーに隣接する盆地地域（瑞麗市）では、僧侶や説法師の誦経や講話の映像メディアも内陸部より多く売

られている。

表1~3は、筆者が2006年から収集を続けてきたローカル市場に流通する海賊版のメディアから、特にシャンヤー芸術団が関係している作品をまとめたものである。シャンヤー芸術団とは、元徳宏州テレビ・ラジオ局タイ族語女性アナウンサー、ワン・シャンヤー（晩相牙／1948年生まれ）が、早期退職した1997年に始めた農民歌手からなる民間団体である。農村で育ったワンは幼少から様々な声の文化に親しみ、その伝統を継承してきた。現在は伝統芸能の危機的状況を憂い、自ら芸術団を率いて後進の育成や村人たちの求める娯楽の歌の提供、俗語の仏教經典の創作活動などに奔走している。

徳宏州の農村地域で流行している冠婚葬祭や仏教儀礼の記念映像制作は、ワンが仕掛け人だとされている。ワンは、ミャンマー側から流入するポップミュージックVCDを見て、2001年に芸術団の歌手によるアルバム盤VCDの制作を始め（表2-No. 3）、さらに仏教儀礼の娯楽提供のために招かれた先で披露したパフォーマンスを記録して依頼者に渡すようになった。芸術団の作品と記念映像制作は瞬間に流行し、さらに、行事に民間歌手を招いて即興歌を歌ってもらうなど新しい実践形式が広まった。ローカル市場で私的な記念映像作品の海賊版がいつのまにか流通するのは、人々のあいだで評判の高い即興歌のパフォーマンスが作品に収録されているからである。

表2からわかるように、シャンヤー芸術団が自主制作したアルバム盤作品は、2001年から2004年に集中している<sup>1)</sup>。2002年の作品のなかには、宗教儀礼に招かれたワンたちが儀礼主催側の了承を得て試しに記念用作品を販売したのものがあり、こうした作品をきっかけに2002年、2003年頃から、村の行事や一家族が開く仏教儀礼では、ワンたちを招いてパフォーマンスを上演してもらい、その様子が収録された記念映像の制作が流行するようになった。また、ワンたちによって販売用に制作されたものではないが、ワンたちが出演している記念作品は知らぬまに業者によって複製され、海賊版が流通するようになった。

こうしたシャンヤー芸術団の活動は、村々のどの自慢を刺激し、即興歌の娯楽活動を活性化させた。なかにはワンたちのアルバム盤のスタイルを模倣して自主制作

<sup>1)</sup> ワンたちは自主制作した作品を手売りしたり、知人の店舗に委託して販売してもらうなどしたが、すぐに海賊版が流通したという。



写真1 露店にて販売されている複製メディア  
(2015年2月徳宏州瑞麗市H村)



写真2 寺院奉納儀礼を記録する民間撮影業者  
(2015年2月徳宏州芒市遮放鎮M村)

表1 入手したシャンヤー芸術団関連の映像作品

No.	メディアの種類	作品数
1	カセットテープ (音声のみ) (正規品)	2
2	CD (海賊版)	1
3	VCD (正規品)	1
4	DVD (正規品)	1
5	VCD (海賊版)	33
6	DVD (海賊版)	12
7	VCDとDVDの両方 (海賊版)	2
	合計	52

注) リストは、主に長期調査 (2006年から2009年) や、その後の短期調査時に、潞西市の店舗や露店にて購入、あるいはワンから贈呈された作品を記載した。なお、これは入手できた作品に限っており、ワンたちの活動を収めた映像作品の実際の数は把握できていない。また、一部の結婚式の記念作品や政府出資作品、そしてシャンヤー芸術団未出演の作品、複製者によるコンピレーション・アルバムは割愛した。

作品を制作する人々も現れた。伝統的観念によれば、掛け合いの即興歌は未婚の若者の娯楽と見なされ、既婚者による掛け合いはごく限られた場面のみ許されていたが、ワンたち芸術団の活躍以来、そうした観念は和らいだ。ただ、ワンや一部の老人にいわせれば、若い世代の村人は伝統的価値観の束縛から解放されてきているが、反面、遠慮や礼儀といった美德の変化も起きているという。それと関連して、歌詞はあまり練り上げられることはなく、歌の享受の仕方も、歌詞や詩的技法を深く味わうより、その場限りの刹那的な快感で終わっていることも多いという。

表2 作品の制作年代

No.	年	作品数	メディアの種類別	作品数
1	1993	2	カセットテープ	2
2	2000 (?)	1 (0)	VCD	1
3	2001	1 (1)	VCD	1 (1)
4	2002	6 (5)	VCD	6 (5)
5	2003	3 (1)	VCD	3 (1)
6	2004	9 (3)	VCD VCD (正規品) VCD (2枚組)	5 (2) 1 (1) 2
7	2005	2 (0)	VCD	2
8	2006	6 (3)	VCD	6
9	2007	2 (1)	VCD VCD (5枚組)	1 1 (1)
10	2008	4 (2)	VCD VCD (4枚組) VCD/DVD DVD	2 (2) 1 1 1
11	2009	3 (0)	VCD DVD (3枚組) VCD/DVD (2枚組)	1 1 1
12	2010	1 (0)	DVD	1
13	2011	3 (0)	CD DVD DVD (2枚組)	1 1 1
14	2013	3 (2)	DVD (2枚組・正規品) DVD (2枚組) DVD (3枚組)	1 1 (1) 1 (1)
15	2014	6 (1)	DVD DVD (2枚組)	4 2 (1)
	合計	52 (19)		

注) 作品数の ( ) 内の数字は、シャンヤー芸術団が販売目的で制作した映像作品数。



表3 表1のNo. 3～7の内訳

作品種類 (A)	作品数	Aの内容 (B)	作品数	Bの内容 (C)	作品数	メディアの種類	作品数	備考		
芸術団の 販売用作品	19	芸術団企画・制作 のアルバム盤	10	ワン・シャンヤー のソロアルバム	3	VCD	3	正規出版VCD1点		
				様々な民謡歌手出 演アルバム	7	VCD	5			
						DVD (2枚組)	2	正規出版DVD1点		
		何らかの行事にお ける活動をもとに した作品	9	仏教儀礼に関連す る作品	7	VCD	8	雨安居明け儀礼 2点、水掛け祭り 関連2点、仏塔建立 儀礼2点、寺院新築 儀礼1点		
その他	2			VCD (5枚組)	1	掛け合い歌コンテ スト、家屋新築儀礼				
海賊版として 流通していた 記念用作品	29	芸術団の私的な作 品	3	日本旅行の記念作 品	1	VCD/DVD	1	2008年日本渡航・ 大阪にて研究公演		
				晩一族の集会の記 念作品	1	VCD/DVD (2枚組)	1			
				団員の息子の結婚 式記念作品	1	DVD	1			
		地域政府の依頼に よる作品	3	水掛け祭り	1	VCD	1			
				政策宣伝	1	DVD	1	「新農村」建設に関 する政策宣伝		
				民族文化の記録	1	DVD	1	主に即興歌の記録		
		伝統行事（仏教関 連の儀礼や結婚 式、新築儀礼）に 関わる作品	20	家族等の小規模で 開催された仏像奉 納儀礼（ボアイバ ラ）の記念用作品	7	VCD	4			
						VCD (4枚組)	1			
						DVD (2枚組)	1			
						DVD (3枚組)	1			
						私的な結婚式の作 品	1	VCD	1	
						村や地域で依頼さ れた作品	12	VCD	6	僧侶の葬儀1点、 仏塔建立儀礼2点、 仏塔参拝関連1点、 水掛け祭り関連2点
								VCD (2枚組)	2	雨安居明け儀礼、 村の門の落成記念 行事
DVD	2	寺院新築儀礼								
伝統行事と無関係 な作品	3	学校校舎落成式	1	VCD	1					
		道路の補修記念	1	VCD	1					
		個人出資の民族文 化の記録	1	DVD	1	主に即興歌の記録				
制作者と販売目的 不明の作品	1	伝統行事と無関係 な作品	1			VCD	1	VTRからVCDに変 換された、最も初 期のものと思われる 作品		
作品合計	49									

## 2. 趣味的歌手から職能的歌師の育成への挑戦

このように掛け合い歌関連の映像メディアは流行し、中高年層の村人たちによって歌の娯楽活動が隆盛に向かった。しかし、ワンは村人たちの歌の詩的技法や歌唱能力の低下を懸念しており、芸術団メンバーに対し、伝統的な歌い方とは異なる、新しい歌い方を指導するようになった。

本来、掛け合い歌とは、2人以上の複数の歌い手が一首ごと即興で編んだ歌詞を問答のように歌い合い、長時間にわたって行われるものであった。そのため、時には同じような表現が反復されたり、言葉遣いや押韻が失敗したりすることもあり、盛り上がりには欠ける時間も長い。それゆえに素晴らしい歌が生まれる瞬間を待つことも、掛け合いの醍醐味のひとつであった<sup>3)</sup>。しかし、ワンは芸術団メンバーに常にレベルの高い即興歌を歌うことを要求し、実践の場で研鑽させる。映像メディアの制作の場合、時間的制約が存在するため、冗長な歌い方をせず常に洗練された歌い方を志向し、あらかじめ練り上げた歌詞を準備させて収録にのぞんだり、現場で歌われた歌でも評価の高い歌を編集するようになった。

また、かつての若い世代が楽しんだ掛け合い歌のスタイルは、掛け合いの時間や歌唱の文脈がより自由であった。しかし新たに開拓されたパフォーマンスの場では、活動や時間が限られているため、従来通りの終わりも盛り上がりも不可測な歌い方では、「詩的技法の精華」(ワンは「タイ族の素晴らしい技法や心」という言い方をする)を味わい、感動することは難しい。村人同士、その場限りの一時的な悦楽で終わってしまうことは、ワンの本意ではない。ゆえに、映像メディアや現場での芸術団メンバーの歌は、できうる限り洗練された詩歌によって、聴衆の「耳を肥えさせる」教育的機能を帯びる必要があるとする。場の雰囲気流された一時的な悦楽は、洗練された詩的技法にもとづく美しい詩歌による感動とはまったく次元の異なる体験だからである<sup>2)</sup>。このような試行錯誤や実践活動を経て、ワンは2013～2014年に制作したアルバム盤作品において、芸術団メンバーのみならず、これまでの活動で出会った歌の上手い農民た

<sup>2)</sup> もちろん場の雰囲気と詩歌の美しさは相互補完的な関係で働くことで、よりよい体験が得られる。どんなに素晴らしい歌でも、周囲が騒然とした環境にあっては、歌の魅力も半減してしまう。それは俗語で書かれた仏教経典の朗誦と聴取においても同様である。ただし、一時的な悦楽は、宗教儀礼という文脈では、宗教的恍惚感を得るために重要であり、なりふり構わない即興歌も別の視点から考察する必要もあるだろう。

ちを招き、限られた時間内でできうる限り洗練された詩歌の歌を収録する試みを行った。ワンを含む歌い手や聴衆が高齢化するなかで、文字では記録することの出来ない、映像による詩歌と歌声の美しさや技巧の記録に尽力することこそが徳宏タイ社会における映像文化の特徴なのである。

## 結びと展望

ワンたち芸術団の企画による映像作品や、村人が私的に残した記念用作品でも、作品は徹底したアマチュア主義を帯びていた。撮影業者は近年増加しているが、ほとんどは映像技術を専門に学んだこともなく、金儲けのために仕事を始めている。画面の手ブレはひどく、カット編集の粗さが目立つこともある。しかし、私は、海賊版として流通し、人々の日常のなかで享受される自主制作作品には、ワンたち歌師や撮影業者、依頼者たち、作品に関わる人々の様々な「思い」や要望(宗教的、社会的など)が作品に反映されていると評価している。アマチュアだからこそ、グローバルスタンダードにならなかった映像の語りの文法に毒されておらず、粗雑な編集のなかに、積み重ねられてきた試行錯誤の痕跡や、思いがけない面白さを発見できる。何より、村人たちは、そうしたアマチュアの映像作品を十二分に楽しみ、分析し、批評する「専門的」な感覚と感性を持ち合わせているのである。

タイ族の映像メディアの活用は、伝統文化を今の社会環境に適応させ、人々を能動的に関わらせようとする創造的実践といえる。伝統文化の継承とは、実践にまつわる様々な身体知や教養知を次世代にいかにか「コピー」させるかにかかっていると表現できるが、芸能を実践し享受する文化的感覚は、映像メディアが介在することにより今後いかなる変化を経験していくのだろうか。これからは継続して調査研究を行いたい。また、展望として、徳宏州の事例と比較するため、ラオスやベトナム国境付近のタイ族地域も含めた研究も計画したい。本研究には、映像作品が流通する、徳宏-ミャンマー・タイ、西双版纳-ラオス・タイ、紅河-ベトナムといった周縁地域のトランスナショナルな動向も射程に入れた共同研究へ展開するための足掛かりとなる研究意義もあったと考えている。

## 謝 辞

本研究は、公益財団法人三島海雲記念財団より学術

研究奨励金をいただき遂行した。調査地では、民間歌手の晩相牙さんたち多くの方々から協力していただくことで、データの収集が可能となった。ここに深く謝意を表します。

#### 文 献

- 1) 伊藤 悟・晩相牙・張興榮：放送文化基金『報告書』平成24年度助成, <https://hbf.yoshida-p.net/search/>, 2014.
- 2) 伊藤 悟：総研大文化科学研究, **8**, 99-115, 2012.
- 3) 伊藤 悟：東洋音楽学会, **79**, 1-24, 2014.
- 4) 伊藤 悟：文化人類学, **80**(1), 38-58, 2015.